

第四回 とやま水と緑の森づくり検討委員会発言要旨

※ は事務局回答

【報告書案について】

- 概要版の使い道は？
- ※ 市町村説明会など普及啓発に利用したい。また、県のホームページにも掲載する予定である。
- もう少し図を大きくしてもらいたい。
- 図などが少し込み入っている。もう少しメリハリをつけたほうが良い。今後修正する際には配慮されたい。
- 里山の「変化」と「荒廃」の表現があるが使い分けているのか？
- 人の目には「荒廃」と映るが、自然の立場からは「回復」「再生」ともいえる。どこに視点を置くのかによって異なる。
- ※ 最初の委員会でも「荒廃」の定義が議論になっていた。報告書では、里山に対する一般意見として「里山が荒廃していると言われている」という表現はあるが、報告内容には「里山の荒廃」という表現は使わず、「変化」「成熟」と表現するようにした。
- サクセッション（遷移）という表現をしても良かったように思う。
- クマの被害や自然災害などにより、森林に対する県民の意識や関心が高まっているこの機を逃さず、この報告書の方針に従って早急に施策を進めてほしい。
- ※ 前回の委員会での中間とりまとめを受けて、早速サポートセンターを立ち上げたところである。今後も可能な限り速やかに対応していきたい。
- 森づくりプラン策定のスケジュールはどう考えているのか？市町村のプランづくりは大変だと思う。
- ※ 次の森林審議会ですら基本指針の議論を始めたい。その後県のプラン案を作成し、ある程度案が固まった段階で市町村プラン策定をお願いすることになる。18年度中には策定したい。
- 市町村プラン策定にあたっては、県と市町村が綿密に連携し、また県がしっかり指導しないと難しいと思う。従来より濃密に進める必要がある。
- 県の試験研究機関や関係機関などはどこに位置づけるのか？サポートセンターの研修でのタイアップなどは考えているのか？
- ※ 県の行う支援・協力体制のなかに位置づけていきたい。
- 里山では生物多様性の保全を目指すことを記述してはどうか？
- ※ 本編では里山再生林、保全林ともに生物多様性について記述している。概要版は省略したが検討したい。
- 里山には公益性と生物多様性の視点は欠かせない。

- 報告書については特に修正する必要はないと思われるので、これで承認したい。
(異議なし)
- 報告書のまとめから引用した提言を行いたいどうか？
(異議なし)

【その他全体を通して】

- 市町村プラン策定前にサポートセンターが稼動するがその関係はどうなるのか？また、サポートセンターの運営にボランティア団体の意見や要望は反映されるのか？
- ※ サポートセンターはソフトで、プランはどちらかといえばハード事業の関係になる。まずはサポートセンターによるソフトを先行させたい。また、サポートセンターは、ボランティアの皆さんが主体性をもって取り組むことへのサポートであり、幅広い方々の意見を反映した運営を行いたい。
- 市でもボランティアの支援を行うこととしており、県や関係団体と連携をとって進めたい。ボランティアといっても様々なレベルがあり、技術的な指導といった点を県のサポートセンターに担ってもらいたい。市町村プラン策定にあたっては、市には専任の職員がいないことなどもあり、県の助言をお願いしたい。また、県は基本的な指針だけでなく、具体的なものを示してもらえれば、実効性のある市町村プランが作れると思う。
- ※ サポートセンターの運営については、皆さんの意見を聞き、反映していくための懇話会を開催したい。また、研修についても多彩なものを準備したい。
- ※ 県と市町村の綿密な連携のもとに、県全体の森づくりを進めていきたい。
- サポートセンター開所式の後のボランティア団体との懇談会では、どのような要望が出されたのか？
- ※ 技術指導と安全教育、森林生態系や新しい緑化技術の知識などの研修会や活動場所の確保、森林インストラクターの資格取得の支援などが出された。また、ボランティア間の連携に対する要望があった。
- 独自課税の導入についてのアンケート結果では、使い道に関する意見が多かったことから、今後、税導入を視野に入れた検討を行うにあたっては、どこに税を使うのかを分かりやすく示さなければ、納得できる分かりやすい議論ができない。
- 県民意識調査では、森林整備は森林所有者の責任で行うべきとの意見もあり、森林の公益性をもっと分かりやすく PR しないといけない。
- 作業道の開設経費の一部負担を森林所有者にお願いしても受けてもらえないなど、森林所有者の意識の低下が課題。森林所有者にも意識を持って森づくりに参加してほしい。調整は大変だが、議論を進め、所有者を含めいろいろな人にサポートしてもらえるよう、PR やキャンペーンを行ってほしい。

- 独自課税の使途については、県独自の内容で、実態に即したものを考えてほしい。
- 本報告書では、里山再生林がポイントになっているようだが、循環型木材生産林と里山再生林とのウエイトはどう考えているのか？
- ※ 里山再生林は、将来にわたって継続的な管理が可能な場所に限られるべきと考えている。
- ※ 新たな税を中心とした財源の検討とともに使途などについても、今後設置を予定している新たな検討組織で充分議論していただきたいと考えており、そこでも幅広い意見を聞きながら進めたい。また、推進方策はニーズや実態にあったものとするために、地域の意見に詳しい市町村の皆さんとも意見交換しながら進めたい。森林所有者アンケートでは、森林整備の必要性を認めながら整備を行うつもりはないとする回答もあり、また、このなかでは自己負担がなくても整備しないと回答した人もいる。このことへの対応も新しい検討組織で議論したい。
- 森林所有者アンケートでは所有境界をはっきりしたいとの要望があるが実態はどうなっているのか？
- 地籍調査は山間部ではほとんど進んでいない。今後森づくりを進めようとする際には、境界確定への要望が多くなるだろう。
- ※ 森林所有者アンケートの回答者は70歳以上の方が多く、森林整備をする意思がないとする回答があることや、道路整備や境界確定への要望が多いことに影響していると思われる。

【委員長集約】

- この検討委員会のきっかけは、去年のクマの異常出没が里山と結びつけられたことにあったわけだが、里山が活用されていた昭和28年にも、昨年以上の人身被害があったことを考えれば、異常出没は木の実と捕食者との関係が本質的な問題であり、里山を昔のようにしたからといって、クマの異常出没が起らないとは言えない。
- ただ、クマを通して県民の里山への関心が高まったことで、里山の公益性について議論でき、細かなアンケート調査もできた。課題はあるものの、大きな前進があったと考える。